

■入賞 本田 栄子（ほんだ えいこ）さん・六十歳／愛知県豊橋市在住

埼玉県所沢市出身。現在、手話通訳士、防災士、豊橋市障害者福祉会館さくらピア事務長を務める。

## 還暦からの手話通訳者は

私は昭和三十三年生まれ、還暦である。耳が聞こえない幼馴染がいたことがきっかけで手話を学び始めた。一九八一年国際障害者年に所沢市で手話講習会に通い、その後結婚、出産、育児を経て昭和六十三年から豊橋市で手話通訳者として活動し始めた。平成の三十年間に文字通り「ゆりかごから墓場まで」いろいろな場面で手話通訳をした。ある時はご主人と一緒に分娩室の廊下で妻の出産を待ち、「おぎゃー」の産声を「今元気な声が聞こえたよ」と伝えた。嬉しい瞬間だった。またある時は危篤の知らせに夜中に病院に行き「二時十二分ご臨終です」の医師の宣告を年老いた妻に伝えた。私の手話を見てみるみる奥さんの目から涙があふれてゆく、目頭が熱くなるような感覚で私の手も熱くなった。悲しい切ない時間を一緒に過ごした。夫婦には子どもが無く、しばらくの間時々私の家に来ては炬燵に入りただただ、しくしく泣いていた。三十代の私は手話の技術も人間的にも未熟で悲しみに暮れる一人ぼっちの彼女に話しかけるすべを持っておらず家事をしながら彼女が泣き止むのを見ているだけだった。

三十代の頃は著名人の講演会など舞台の通訳が多かった。四十代の頃は高等教育の情報保障に関わり、大学の授業の通訳を担った。五十歳から、縁あって今の職場「豊橋市障害者

福祉会館さくらピア」に勤務することになり、聴覚障害以外の身体障害、知的障害、精神障害、難病などあらゆる分野の障害者や関係者と関わる仕事をしながら年を重ねてきた。

そして今、六十歳である。五十五歳の時これからGO！GO！だねと友人たちと話していたその日、「骨髓バンクドナー登録終了のお知らせ」なる封書を受取り思いの他ショックを受けた。骨髓バンクの年齢制限：体の機能は確実に衰えているのだ。実際今、若い人に聞こえる音が自分には聞こえにくかったり、九十分の講演が延長すると脳が疲れて回転が遅くなるのを痛感する。若い時は早い手話には早口で対応できた読取通訳もこの頃思うように日本語が浮かんでこないことも少なくない。体力のいる現場はちょっとしんどくなってきたのである。そろそろ引退しようか……

けれど六十歳になって昔よりの少しは役に立っているかな良くなったかなとチョット胸を張れる通訳現場もある。

それは舞台等ではなく「ミニミニティ、病院や学校の生活通訳だ。高齢化社会を迎え障害は複雑化し風邪や腰痛だけでなく、癌や、介護や、精神疾患や認知症の現場にも手話通訳に行く。結婚式の通訳は若い人に任せて私は葬儀の通訳を依頼されることの方が多い。警察や裁判所の現場もまた然りだ。

六十歳の今は三十歳の私より知識も技術も深まっている。現場の経験も積んだし数多くの研修の場所にも足を運んできた。

手話通訳を必要としている聴覚障害者が病気やトラブルを抱えて心細い時、そこに寄り添い安心して言葉の橋渡しができ、気持ちを支える通訳ができるのは今からではないだろうかと思うことにした。引退するのはもう少し先でいいだろう。

コタツで泣いていた人は数年前に亡くなった。次に誰かが来たら、一緒にコタツに入り静かに故人の思い出話や季節の花便りなどをひらひらとあたたかい手話で語り合うことができると思うのがよい。

